



新病院長の紹介



院長
中尾 浩一

社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院

公益財団法人肥後医育振興会におかれましては、益々ご発展のこととお慶びを申し上げます。

さて、私こと、平成二十九年四月に社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院長に就任致しました中尾浩一と申します。一九八五年に熊本大学を卒業し、一九九二年に同大学院を修了した後、循環器内科とくに冠動脈インターベンションを専門として参りました。皆様には、患者さんのご紹介、転院後のご加療、さらにかかりつけ医としての治療継続など、平素より大変お世話になっておりますことに、心より感謝を申し上げます。

「医療を通じて地域社会に貢献する」。済生会熊本病院の理念はとて「シンブルなものです。そのアクセントは「地域」にあります。一九三五年の設立以来、この理念のもと、医療の機会に恵まれない人々のために無料低額診療や過疎地医療、住民保健活動などの福祉事業に力を注ぎながら今日まで歩んで参りました。

医療活動においては、「救急医療」「高度医療」「地域医療と予防医学」「医療人の育成」という四つの基本方針を定め、これに取り組んでいます。中でも救急医療には特に力を入れており、「断らない救急」をモットーに地域の皆様が安心して暮

らせるように救急の体制、設備を充実させています。

私たちは専門性の高い治療を主な役割としていますが、このことは、医療全体の広がりや時間軸からすれば、そのごく一部を担っているに過ぎないことを意味しています。地域の医療機関、実地医家の皆様との連携なくして、当院はその理念を達成することができません。皆様からの信頼をいただいたの良好な医療連携は、私たちの「生命線」とも言える大切なもの、と考えています。

さて、少子高齢化と財源の不足は、私たちの提供する医療の有り様に「変化」を求めています。折しも二〇二五年時点の医療ニーズの推計に基づく「地域医療構想」の実現に向けた方策について議論が始まっています。熊本は医療機能分化と連携が進んでいる地域と評価されていますが、それでも最終的な「地域包括ケアシステム」の実現までには多くの困難が予想されています。「医師と患者」の関係のみで医療が語られる時代は終わりました。私たち医療者も、そして患者さんも、「社会」と「資源」についてより強く意識しなければならなくなっています。

この困難な時代に重責を担うこととなり、大変身の引き締まる思いであります。もとより浅学菲才の身ではありますが、当院一、九〇〇名の職員と共に「医療を通じて地域社会に貢献する」病院であり続けるために努力して参る所存です。皆様には、当院へのこれまでと変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

熊本赤十字病院



院長
平田 稔彦

平成二十九年七月一日付で熊本赤十字病院院長を拝命いたしました平田稔彦（ひらた としひこ）と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

昨年の熊本地震の際には、当院に對しまして多大なるご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。私は、昭和五十七年に熊本大学医学部を卒業後、第二外科に入局し、平成八年より熊本赤十字病院に外科医として勤務しております。

熊本赤十字病院は、昭和十九年、日本赤十字社熊本支部診療所として開設、昭和五十年に現在の長嶺の地に移転し、病床数四九〇床、標榜診療科二八科、総職員数一、四六七名（平成二十九年四月一日現在）の地域の中核病院として、また救急医療・災害医療の拠点として二十四時間三六五日体制で診療にあたっております。

近年の状況といたしましては、平成二十二年に「地域医療支援病院」の認定を受け、地域の急性期病院として、地域完結型医療に貢献できるよう、様々な活動を行っております。また、平成二十四年には熊本県の基地区域医療センターの機能を拡げ、総合救命センターの新築を開始し、総合救命センターの機能を拡げ、子ども医療センターの機能を拡げました。平成二十五年には西日本で最初となる小児救命救急センターの指定を受け、ドクターヘリセンターと小児救命救急センターを兼ね備えた全国初の施設として、高度救急医療を実践しております。平成二十七年四月から開始しました「くまもとCTを利用した地域医療連携」も多

くの先生方にご利用いただき、好評を博しているところであります。

私たちの病院の基本理念は「人道・博愛・奉仕の実践」と社会の「まさかの時」に寄り添うために「まさとこ」を掲げています。これは、一言で言えば「社会貢献」ということになり、組織という社会形態が誕生して以来、その長い歴史の中で自分たちだけで生き残って、私利私欲をひたついてもありません。唯一、社会に貢献した組織のみが存続しています。病院という私たちの組織も例外ではなく、社会貢献を指さなければ生き永らえることはできません。このことには、私共も自覚をもち、社会のために「存在意義」として「病院は社会のためにある」という認識こそが、私たちの存在意義であり、最終目標であると考えています。ただし、この目標に明確なゴールはありません。この目標という病院の使命が、行くことになり、

当院は日本赤十字社の一員として、世界的、そして地域的視点の両方から「社会貢献」を行う責務があり、それが赤十字としての社会的責務を自覚して取り組んでいます。まず世界的視点からは、赤十字として災害・紛争地への人的貢献を行い、そのための備えを怠ることはありませぬ。地域的な視点では、ドクターヘリの基地病院として県内の救急医療の要を果たし、二十四時間三六五日体制で、高齢者から子どもまで、あらゆる疾患に対応できる医療機能を充実させたいと考えています。

超高齢社会とも言われる現代、熊本医療圏においても、二〇二五年には六十五歳以上の高齢者人口が約三割を占めるといふ推計がでております。それに伴って増加するであろう様々な疾患に備えて、地域の医療機関との連携を今まで以上に強化し、皆様の期待にお応えする所存でございます。皆様へのご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。